

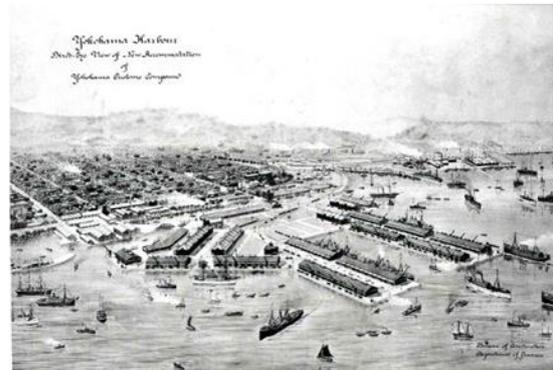
『日本の祭 横浜開港五十年祭』について  
講演者：平野正裕（元横浜開港資料館・横浜市史資料室員）

どうもこんにちは。平野でございます。ご覧いただいた『日本の祭 横浜開港五十年祭』という1909（明治42）年製作の実写映画について解説を加えたいと思います。

このフィルムは1909年の「横浜開港五十年祭」を写しているものですが、「開港五十年祭」は単に横浜がミナトを開いてから半世紀が過ぎたというだけではなく、横浜港が大きく変わった時期でもありました。横浜は1859（安政6）年に港を開いてから、実に30年以上も船が陸続きのところに接岸できませんでした。現在の大栈橋の原型ができるのが1894（明治27）年。加えて、現在では観光施設となっている赤レンガ倉庫がある新港埠頭、これが1909年には建設中でした。新港埠頭は13もの接岸岸壁を持つ港湾施設で、海路と鉄道線路とが結ばれる結節点となりました。それまでの横浜港は、生糸という日本最大の輸出品を独占的に取り扱うことによって、栄えるわけですが、1909年となると、さまざまな輸出品・輸入品も増えてくる。物流と通関に適合した近代的な港湾施設が必要とされてくるのです。開港50年を迎える1909年は、その具体像が見えてきた年でもありました（図1）。

新港埠頭を会場にして、「横浜開港五十年祭」が開かれるわけです。このとき横浜市は、現在でも市民ならば必ず歌えるといわれている「横浜市歌」を作り、また、経済界では開国の立役者としてのペリーや、通商条約締結を推し進めた大老・井伊直弼などの顕彰が行われています（図2）。五十年祭の賑わいを写した絵葉書はたくさん作られています（図3）。ちょうどこの頃の横浜は、貿易港としてばかりでなく、工業化も始まっており、人口40万人を超えて都市として変貌していく時期です。例えば盛り場の伊勢佐木町界隈を例にすれば、規模の大きな呉服店は、それまでの「座売り」、畳の上で膝を合わせて物を売るような販売形態から、ショーウィンドーを備えた「陳列売

り」へとデパート化への歩みを進めていきます。さらには、芝居小屋での映画上映に加えて、「Mパター商会活動電気館（敷島館）」や「開港記念電気館」など映画常設館もできはじめる、そういう時代でした。



【図1】 Outlines of the Improvement Works Yokohama and Kobe Custom Houses, 1910. 横浜開港資料館所蔵



【図2】上：「横浜市歌」作詞：森林太郎（森嶋外）・作曲：南能衛 絵葉書、小澤コレクション 50年祭02(2) 横浜市史資料室所蔵／下：ペリーと井伊の顔を配した「五十年前の横浜」絵葉書、小澤コレクション 50年祭03(2) 横浜市史資料室所蔵



【図3】「横浜開港五十年祭祝典 祝賀會々場ノ光景」絵葉書、小澤コレクション 50年祭10(2) 横浜市史資料室所蔵

今回見ていただいた映像には、「関内」と呼ばれる地区の、4つの地点が特定できました（図4）。



【図4】撮影場所特定箇所

A:本町一丁目角、B:北仲通六丁目、C:本町一丁目→二丁目、D:住吉町四丁目



【図5】上:本町通り Courtesy of BFI National Archive/下:  
「横浜開港五十年祭市内之光景」(本町通り)絵葉書、小澤コレクション  
50年祭 07(2) 横浜市史資料室所蔵

第1は、本町一丁目（地点A）です。フィルムにはほんの数秒しか写っていませんが冒頭、本町一丁目から、二丁目三丁目方面を写したショットで、ちょうどこれと同じ場所から写された絵葉書が残っています（図5）。

「本町通り」はいわば横浜のメインストリートです。画面左手の幕の後ろは、時計塔の

ある「町会所」と呼ばれた建物がありました。これが1906年の火事で燃えてしまって失われ、空き地となっていました。その後、開港記念横浜会館がこの場所に建ち、横浜市開港記念会館として現存しています。

幕の奥に竹で組んだ施設が見えますが、これは本町一丁目の山車が置かれている場所です。1870年、明治3年につくられた巨大な山車でしたが、1909年当時になりますと、電線・電信線に引っかかって、背の高い山車は巡行することができなくなり、「飾り物」になってしまっています。この開港五十年祭関連の絵葉書にも、飾り物になった山車を写したものがいくつか売られています（図6）。本町一丁目の賑わいを捉えたショットは一瞬ではありますが、とても貴重なものです。



【図6】「開港五十年記念祭 本町一丁目天照皇太神ノ鉾山車」絵葉書、小澤コレクション 50年祭 07(1) 横浜市史資料室所蔵

第2は、北仲通六丁目（地点B）です。ここには江戸時代以来、神社「洲千弁天社」があり、その後は灯台寮や横浜裁判所や昭和初期には横浜生糸検査所などが置かれたところです。フィルムには大名行列の人たちが繰り出すありさまが写されています（図7）。実は大名行列、他にも取り組んだ団体がありましたので判断に悩みましたが、横浜輸入商青年会の大名行列であることが分かりました。それを証明するのは左手の建物、木の枝の陰に隠れて見えるベランダで、これは当時の横浜小学校の校舎です。もうひとつの有力な状況証拠は、背景の遠方に木が生い茂っている

ことです。横浜の中心部でこれだけの樹木を維持できている場所はなかなかありません。横浜公園か、あるいは灯台寮などの国有地化されていた場所ぐらいでしょう。そして灯台寮の隣には横浜御用邸の建物(旧・東海鎮守府)があり、この時代使われていたかどうか確認できていませんが、当時の地図上には出ています。ですから、こういった木が茂るだけの土地を温存していただけるのは北仲通りの国有地周辺だということで、間違いなくこれは横浜小学校から繰り出した横浜輸入商青年会の大名行列だったことが特定できたわけです。大名行列は、花咲町の人々なども取り組んでいますし、絵葉書にも写されています(図8)。



【図7】横浜輸入商青年会の大名行列 Courtesy of BFI National Archive



【図8】「横浜開港五十年祭紀念 花咲町大名行列(其一)」絵葉書、小澤コレクション 50年祭 09(1) 横浜市史資料室所蔵

その次に出てくるのが、福富町二丁目の山車が巡行するシーンです(図9)。これは本町一丁目から二丁目方面を写した(地点C)もので、著名な商店としては、本町一丁目と二丁目を仕切るあたりの画面右手に美術商のサムライ商会が映っています。左手には平沼貯蓄銀行、あるいは生糸仲継商の中根商店などが映されています。福富町二丁目の山車も台

座の上に人形が載っている「江戸型の山車」ですけれども、どうもこの福富町二丁目の山車は、市中での巡行を可能とするために小さな人形に置き換えているような気がいたします。屋台本体と人形との対比からみて、その



【図9】本町一丁目から二丁目を斜めにとらえた一連のショット。福富町二丁目の山車巡行。Courtesy of BFI National Archive



【図10】印半纏の男たち 撮影場所不詳  
 Courtesy of BFI National Archive



【図 11】魚河岸連による「張り子の手船」屋台(上)と大鯛の囃子屋台(下) Courtesy of BFI National Archive

ように思うのです。

さて、印半纏の男たちが大勢登場する場面(図 10)ですが、このあたりは撮影場所が特定できません。しかし開港五十年祭の楽しさをその表情であらわしています。魚河岸の人たちによる「張り子の手船」の屋台ですとか、あるいは大きな鯛の囃子屋台などが、魚河岸連によって巡行(図 11)されていることもわかります。これも絵葉書などが作られていまして、それが今でも残っています。

もう 1 か所特定できるのが、住吉町四丁目(地点 D)のシーンです。日の出屋新聞店という看板が決め手になります(図 12)。ここでは、お祝い事ですから、鳶職のような人たちが木遣り歌を歌っている。そして、現在の神奈川新聞社の前身にあたる横浜貿易新報社が繰り出した張り子の象、これは開港した 1862(文久 2)年に見世物として象が日本にやってきて人気を博したようですが、その張り子の象が巡行したことが、映像に収められています(図 13)。これも絵葉書が出ています。

終わりは芸妓連の手古舞です(図 14)。手古舞というのは、江戸の山王祭・神田祭などの祭礼で山車に付き従う、本来は鳶職をいったので

すが、それが明治時代になって鳶職の衣装を着た華やかな芸妓さんたちに代わっていきます。外国人風の顔立ちの方々(図 14 の 3 枚目)もおります。このシーンは芸妓さんの顔を大きく撮りたいがためにカメラがアップに寄っており、その分、背景が映らないのでどの場所で撮影されたか分かりません。五十年祭の手古舞については絵葉書が何種類も作られています。



【図 12】住吉町四丁目「日の出屋新聞店」前  
Courtesy of BFI National Archive



【図 13】張り子の「文久二年舶来の大象」横浜貿易新報社  
Courtesy of BFI National Archive

横浜開港五十年祭は多くの絵葉書が発行されて、賑やかなありさまが写真で撮られています。このような動画が残っていることはなによりも非常な驚きでした。1909年7月1日から3日、それから4日と5日が追加されて、大体 20 万人の人出があったという開港五十年祭は、近代横浜最大のイベントでした。参加した市民の表情や身振りが映されて、111 年前の人々への共感や実感がわかります。非常に貴重な動画であると思います。この祭典以降、経済不況の影響を横浜は受け、(その状況は)第一次大戦好況まで続きます。大正初期には、横浜港の改良工事も完工し、新港埠頭の利用も本格化しますが、工業化がすすんで、横浜もさまざま

な社会問題をはらむようになります。開港五十年祭以降、横浜では七十年祭、戦後も一〇〇年、一三〇年、一五〇年と、開港を記念するイベントは行われるわけですが、このような屈託のない市民の笑顔を伝える映像はなかなか見られないと思っております。どうもありがとうございました。



【図14】芸妓連の手古舞シーンから 撮影場所不詳  
Courtesy of BFI National Archive